悪徳商人にハメられたTSハンターは、相棒剣士の重すぎる百合愛からもう逃げられない

とおか

目次

・第一章
・第二章
・第三章
・第四章
・第五章
・第六章
・エピローグ

第一章

安酒の臭いが立ち込めるギルドホールには、荒くれ者たちの無関心が寒々しく沈殿していた。
強者が弱者を搾取する日常の縮図。その淀んだ空気のなか、受付員が事務的な声を落とす。
「では、報酬をお渡ししますね」
チャリン、と大理石の床に間の抜けた金属音が跳ねた。
脂にまみれた数枚の金貨が、鈍い光を放ちながら円を描いて止まる。
床に転がるその端金を静かに目で追う俺達。
かつて大陸に名を轟かせた凄腕の元・Sランクハンターでありながら、呪いの泉によって華奢で非力な小娘の肉体へと変貌させられてしまった俺、レナリア。
そんな俺を拾い、今は相棒として隣に立ち続けてくれているのが、この理不尽な精算の対象となっている屈強な女剣士・アルマだった。

それは数日前のこと。

街の外壁を包囲し、守備隊を半壊させていた双頭の巨大甲殻獣。
それを身の丈ほどもある大剣を振るい、その分厚い甲殻ごと両断してみせたアルマの武功の対価が、足元に転がるこの錆びた端金だった。
「……はい、精算完了です。防壁に飛び散った魔獣の体液の特殊清掃費、それに事後申請の不備に伴う諸経費を

差し引かせていただきました。次回からはもう少し周囲への配慮をお願いしますね」
カウンターの奥で、油ぎった笑みを貼り付けた受付員が書類を整える。
その隣には、豪奢な毛皮を羽織った肥満体の商人がふんぞり返り、手元の革袋をジャラリと鳴らして、これ見よがしに重厚な金貨の音を響かせていた。
十あった報酬の八割を公然と掠め取る、見え透いたピンハネ。
周囲のハンターたちもそれに気づきながら、誰一人として視線を合わせようとはせず、ジョッキの底を見つめて押し黙っている。
かつて上位ランクの現場を仕切り、幾重もの契約を交わしてきた俺の目から見れば、虫唾が走るほど下劣で陳腐な手口だった。

だが、当の張本人はといえば。
「ふむ……なるほど、街の美観を損ねたのなら仕方がないな。差し引きがあっても、今日の焼きたてパンと酒代くらいにはなる。討伐の手応え自体は悪くなかったし、いい運動になったぞ」
大剣を背負い直したアルマは、床の金貨を拾いながら至極爽やかに微笑んでいた。
怒りも、悔しさもない。
ただ頭上に降ってきた雨を手で払うかのような、あまりにも無頓着な受容。
「……おい、待て」
俺の喉の奥から、思わずドスの利いた声が漏れ出た。
だが、小娘の喉を震わせて吐き出されたそれには凄みなど微塵もなく、男どもにはただの愛らしい強がりにしか聞こえない。

「おや、おチビちゃん。大人の取引に口を挟むもんじゃないよ」
商人が下卑た視線で、俺の服の隙間から覗く細い手首や首筋をねっとりと舐め回す。
さらに、俺のただならぬ気配と反論の兆しを敏感に察したのだろう。背後の酒場席から椅子を引く耳障りな音が重なり、商人の取り巻きであろう大男たちが、数人集まってきた。
逃げ道を塞ぐように、あっという間に周囲を取り囲まれる。
「お前なぁ……アルマ！　納得してんじゃねぇよ！　あいつら、明らかに規約違反の――」
「いいんだレナリア。美味い酒が飲めれば、それで十分だろう？」
悪気のないアルマの大きな手が、俺の金髪をポンポンと無邪気に撫でる。
その屈託のなさに、俺の頭の芯でブツンと何かが切れる音がした。
（この筋肉バカ……！　容易くこなしたとはいえ、あの怪物の前に命の危険を晒したんだぞ……ッ!?）
己の身体が非力な小娘に落とされ、尊厳を踏みにじられる惨めさを知ったからこそ、この規格外にお人好しな相棒が搾取される様を、俺のプライドが許さなかった。
「おい、受付の豚。それにそっちの脂身野郎」
俺をなだめようと伸びてきたアルマの手を軽く払いのけると、近くにあった丸椅子の上へと飛び乗った。
視界の高さを強引に引き上げ、ショートパンツの裾から伸びた細い脚を、カウンターの木製テーブルの上へとドンと踏みつける。
太ももものラインがあらわになる格好だが、恥じらいなど知ったことか。男だった頃の不遜な気迫をそのまま纏い、身を乗り出して商人の脂ぎった顔面へと鼻先数寸まで顔を近づけた。
「今すぐその汚ぇ計算書を引っ込めろ。ギルド規定第三条『緊急防衛戦における付帯損害の免責条項』……今ここで、一字一句暗唱してやろうか？」

カウンター越しに、受付員と商人の顔色がぴくりと引きつる。
「な、なんだこの無礼な小娘は……！　部外者がでたらめを言うな！」
「でたらめ？　めでたい頭だな、おい。ギルド規約第二十四条、甲殻種における『甲殻・腱・魔核の優先買取権』の算定基準を言ってみろ」
唾を飛ばして喚く商人の言葉を、俺は冷徹な眼光と淀みない舌鋒で真っ向から叩き潰す。
「あの双頭獣の胸殻は、王都の防具工房なら金貨三十枚は下らねぇ。防壁の清掃費？　あんなものは市街防衛の付帯条項で自治体が全額負担するのが大陸共通の法規だ。お前らが抜こうとした差額、金貨二十枚以上……どこへ消える予定だったんだ、あぁ？」
「ぐ……っ！　そ、それは運搬費や解体のリスク管理費としてだな……！」
「へぇ、現場で一刀両断されて魔核すら傷ついてねぇ上物を、安全な城門前で回収するだけのどこに『リスク』が存在するんだ？　教えてくれよ、経済の天才商人様？」
テーブルに置いた足の爪先でコツコツと木目を叩き、俺は皮肉たっぷりに口角を吊り上げた。
「脂身商人さんよぉ。どうせ難癖をつけて買い叩き、浮いた金貨でそこの受付の豚と山分けする算段だったんだろ？　帳簿の偽造、職権乱用、ギルド法違反……今ここで監査官を呼んで、その重たい金貨袋の出どころを一から洗ってもらおうか？」
「ひ、ぐ……ッ！」
引きつった顔を見せる商人。そして青ざめる受付係。
ホールで耳をそばだてていた荒くれ者たちから、どっと大きな笑い声と歓声が沸き上がった。
「おいおい聞いたかよ！　正論すぎて商人様が泡吹いてやがるぜ！」
「すげぇな嬢ちゃん！　口の利き方も最高だ！　惚れちまうぜ！」

飛び交う口笛と野次馬どもの囃し立てる声。
完全に赤っ恥をかかされた商人は、顔面を真っ赤に沸騰させ、額から冷や汗と脂を吹き出しながら怒鳴り散らした。
「く、口の減らない生意気なメスガキめ……！　お前たち、何を突っ立っている！　そのガキを黙らせろ！　二度と偉そうな口が利けないよう、身体の芯までたっぷり分からせてやれ！」
商人の合図とともに、背後を取り囲んでいた屈強な男たちが一斉に間合いを詰めてきた。
丸椅子の上で口上を述べていた俺の背後から、節くれ立った下卑た指先が、ショートパンツの薄い布地に触れた。そのままお尻の割れ目へと容赦なくぐっと指をめり込ませてくる。
「ひゃうっ……!?」
予期せぬ場所への強烈な侵食感に、情けない悲鳴が漏れ、膝の力が抜けて身体が大きくぐらりとよろめく。
だが、床へ落ちるよりも早く、正面に回り込んできた別の大男の太い両手が、倒れ込む俺の華奢な上半身を下から抱きとめるように受け止めた。
そのまま、ダボついたシャツの布地越しに、未発達な胸元を鷲掴みにされる。
「おっと危ねぇな、お嬢ちゃん。へへっ、ガキみてぇな身体じゃねぇか」
「な……っ、離せ、てめぇ……っ！」
「威勢がいいのは口だけか？　おい見ろよ、こいつ胸当てすらつけてねぇぞ。……ほら、先端がもうこんなにコリコリに尖ってやがる」
大男の無骨な指先が、薄い布地を押し上げる小さな突起を捉え、親指と人差し指で挟み込んでコリッと執拗に転がした。
「ひゃうんッ……!?　ふ、ぁあッ……！」

脳天を突き抜けるような電撃的な痺れ。
泉の呪いと、アルマによる度重なる夜の開発によって異常なまでに研ぎ澄まされた肉体が、敵の侮蔑的な指先一つで勝手に歓喜の熱を帯びてしまう。
身体を支える男の太い腕。お尻の穴表面を圧迫する指。そして胸の先端を弄ぶ無慈悲な愛撫。
いつの間にか周囲の男どもは、暴力を振るうのではなく、人前で羞恥を与えて俺を屈服させて黙らせる方向へと舵を切っていた。
「ギャハハ！　聞いたかよ今の声！　乳首を一回いじられただけで腰浮かせて甘ったるい声出しやがったぜ！」
「口じゃ偉そうに規約を語るくせに、身体はただのウブで淫らな生娘そのものじゃねえか」
「ほら、もっと可愛い声を聞かせてみろよ。さっきまでの威勢はどうしたんだ、あぁ？」
四方から浴びせられる下品な言葉責めと、下卑た嘲笑。
さらに背後の男が、ショートパンツの隙間から太ももの内側へと手を滑り込ませ、熱狂の余韻でじっとりと湿り気を帯びていた秘所の窪みを下着越しに押し潰すように擦り上げる。
「や……っ、やめ……っ！　ふざけんな……んくぅッ、あ、ぁあッ……！」
男としての魂が激しい嫌悪と怒りに猛り狂うのに、この呪われた小娘の肉体は、与えられる屈辱の熱さにすら蜜を滲ませてビクビクと歓喜の痙攣を繰り返してしまう。
あられもない嬌声を必死に噛み殺そうと、俺は強く奥歯を食いしばり、悔しさで滲む視界の中で男どもを激しく睨みつけた。
その時だった。
「……私の相棒に、汚い手で触れるな」

ギルドホール内の湿り気と喧騒が、一瞬にして絶対零度の氷壁へと凍りついた。
涼やかで、けれど深淵の底から響くようなアルマの低音が落ちた瞬間、空気が質量を持って軋みをあげる。
いつの間に抜かれたのかすら、誰の目にも見えなかった。
身の丈ほどもある美しく研ぎ澄まされた鋼の大剣。その切っ先は、俺の胸元とお尻に触れていた大男たちの喉笛へ、わずか数センチ手前の距離でピタリと吸い付くように静止していた。
男たちは呼吸すら忘れ、顔面を土気色に変えて完全に硬直している。
肌を撫でるだけで肉を断ちそうな鋭利な殺気と、針の穴を通すような精密な剣技。
ざわめいていた酒場全体が、まるで時が止まったかのように静まり返った。
（……アルマ。やっぱりすげぇな、お前はよ）
男どもの拘束が緩んだ隙に、俺は乱れた服の襟元を片手で整え、拘束から抜け出しながら小さく口元を緩めた。
どんな窮地に陥ろうと、この相棒の規格外の武力だけは裏切らない。男としての矜持が、頼もしすぎる背中に向けて誇らしげな笑みをこぼしたの……だが。
「……おい、そこの大男」
大剣を構えたまま、アルマは琥珀色の瞳を細め、凍てつくような美貌のまま静かに問い詰めた。
「お前たち、今……レナに何をした？」
「ひ、ひぃっ……!?」
「服の上から、あの敏感でコリコリとした可愛らしい乳首を指で弄び……レナにあんなにも甘い声を上げさせたな？」
静寂に包まれたギルドホールに、澄み切った美声がこれ以上なく朗々と響き渡る。

「……おい、アルマ……？」
俺の喉から、思わず裏返った間の抜けた声が漏れた。
だが、当の女剣士の怒りは全く見当違いの方向へ加速していく。
「レナの胸はな、あんなにも可憐で薄いのに、先端だけは少し指先で転がされるだけで、あっという間に尖り敏感になるんだ。そこを押し潰すように摘まむと、口では男勝りに威嚇しながらも、腰をびくびくと跳ねさせて可愛い悲鳴を漏らしてしまうんだぞ？　そんな箇所を、貴様のような無骨な指で汚すとは」
「な……っ、何を解説してやがんだ……っ!?」
俺の制止など意に介さず、アルマの切っ先が、今度は俺の背後にいたもう一人の男の指先へとミリ単位でスッと向け直された。
「お前……レナの服の上から、お尻の奥まった穴に指を押し当てていただろう」
「め、滅相もございません……っ！」
「レナのお尻は、少し指の腹でつつかれただけで全身と連動して過敏に仕上がっているんだぞ？　触るだけで泣きそうな声で縋り付いてくる……私ですら、普段は『そこだけは恥ずかしすぎるから触るなバカ！』と滅多に触らせてもらえない場所なんだ。それを初対面のお前ごときが……よくも辱めてくれたな。お前のその下劣な指、根元から叩き切ってやろうか」
「おい馬鹿野郎!!　もうしゃべんな!?」
俺の絶叫が木霊する中、周囲の荒くれ者たちはゴクリと喉を鳴らし、完全に想像を掻き立てられた生唾を飲むような熱い視線を、俺の華奢な身体へと一斉に注いでいた。
助けてくれたはずの相棒が、敵への殺意に満ちた真顔のまま、俺の身体の淫らな急所と、自分たちが夜な夜などんな痴態を繰り広げているのかを、居並ぶ冒険者や商人たちの前でこれ以上なく雄弁に大公開している。

「な、なんだレナ。私はお前の尊厳を守るために怒っているんだが……？」
「守れてねぇよ！　むしろ粉々に粉砕されてるよ！」
涙目で怒鳴り散らす俺の抗議を、アルマは心底不思議そうに小首を傾げて受け止めるだけだった。
俺はぶすっと露骨にすねた表情を作り、胸元を庇っていた腕をわずかに緩めて小さく咳払いをした。
いつまでもこの筋肉女の天然な羞恥攻撃に付き合っている場合ではない。冷徹な意識を頭の隅で立ち上げ直す。
俺は床を踏み鳴らし、部屋の隅で膝を抱えるように小さくなって青ざめている商人へと、足早に詰め寄っていく。
商人は顔面を土気色に変え、喉を鳴らすことすらできずにガタガタと顎を震わせていた。
アルマの規格外の武威への恐怖と、今まさに赤裸々に語り尽くされた俺の身体の淫らな情報。二つの感情の間で、その脂ぎった豚面は奇妙に歪んでいる。
そして何より、その下卑た視線は、恐怖に引き攣りながらも、薄いシャツの下で硬く浮き出たままの俺の胸元を、無遠慮にじっと見つめていた。
「おい……見てんじゃねーよ……」
湧き上がる殺人的な羞恥を必死に抑え込み、深い深いため息とともに、両腕でそっと己の平坦な胸元を掻き抱いて隠した。
強く睨みつけると、商人は情けない悲鳴を上げて首を縮め込む。
「ひっ……！」
「……規定通りの満額報酬、金貨十枚を出せ。あと……人の胸と尻を触った慰謝料、それに……人をここまで大勢の前で辱めた迷惑料として、プラス金貨二枚。合計十二枚で手を打ってやる」
「え……？　い、いや、辱めたのは明らかに……そちらの剣士さんでは……？　それに、金貨十二枚なんて大金

は……」

商人が脂汗を垂らしながら、往生際悪く懐の金貨袋をかばうように手を引っ込めようとした、まさに、その瞬間だった。

――ドゴオオオンツツ!!!!

轟音とともに、ギルドの床が蜘蛛の巣状に砕け散った。

アルマが無造作に振り下ろした大剣の切っ先が、商人の股間数寸手前の床へ、深々と突き刺さっていたからだ。

ギルドホール全体が震動し、ジョッキが倒れて酒がこぼれる。

アルマは瞳を凍りつかせ、大剣の柄に片手を置いたまま、冷酷極まりない笑みを口元に浮かべていた。

「……レナは優しいな」

「ひっ……!?　あ、ぎゃ……っ!?」

商人の股間から、じわりと生温かいシミが広がり、床へ滴り落ちる。

アルマは至極平然とした声で、死神のような宣告を落とした。

「私なら……お前のその薄汚い命と引き換えに、身ぐるみを剥いで全財産を置いていけと言うところだが？　お前ごときの端金と命など、レナのあの可愛い喘ぎ声ひとつの価値にも到底及ばないのだからな」

「ひぃいいいいっっ!!　お、置きます！　全部置いていきますからぁぁぁッ!!」

商人は悲鳴を上げながら、懐にあったずっしりと重い金貨袋を三つ、四つとカウンターの上へ狂ったようにぶち

まけた。十二枚どころか、手持ちの数百枚の金貨がジャラジャラとカウンターから溢れ返る。
「ヒッ……ヒィィッ！」
腰を抜かし、股間を濡らしたまま床を這いずり回る商人と、それを見て泡を吹いて気絶した受付員。
取り巻きの荒くれ者どもも一目散に蜘蛛の子を散らすように逃げ去り、酒場には息を呑んだ冒険者たちの静寂だけが残された。
「……ふむ。話が早くて助かったな、レナリア」
「助かったな、じゃねぇよ……お前、加減って言葉を知らねぇのか……」
カウンターの上に無造作に積み上げられた、本来の報酬を遥かに上回る金貨の山。
俺は深い頭痛を覚えながら、細い指先でずきずきと痛む額を強く押さえた。
「……これじゃあ俺達が強奪したみたいじゃねぇか」
周囲の冒険者たちから向けられる、まるで凶悪な略奪者を見るかのような引きつった視線を受け流しながら、俺は深いため息を吐き出すのだった。

宿屋の一室。
重厚な木製テーブルの上に、ずっしりと重い金貨袋をドスンと放り出し、俺は腕を組んでふてぶてしく仁王立ちを決めた。

「……なぁ、アルマ。ちょっとそこに座れ。たっぷり説教してやる」
眉間に深い皺を刻み、キッと睨みつける。
ベッドの端に腰掛けたアルマは、瞳をぱちくりと瞬かせ、心底不思議そうに小首を傾げた。
「……説教？　ギルドでのあの、辱めのことか？　だが、あれはお前の身体の魅力と急所を正確に相手へ伝えて反省を促すための――」
「いや、辱めはともかく！　……いや、あれもあれで全然よくねぇし、後で百回くらい締め上げたいところだが、今はその話じゃねぇ」
思わず耳まで赤くなりかけたのを強引に咳払いで誤魔化し、俺はテーブルを小さな拳でバンと叩いた。
「本題はそこじゃねぇんだ！　お前、あの豚どもに報酬の八割を公然とピンハネされて、なんでヘラヘラ笑って受け入れてんだって話だ！」
「だが……あの金でも今日のパンと酒代にはなったし、生活に支障はなかったぞ？」
「支障がないからいい、で済む問題じゃねぇんだよ！」
平然と言ってのける筋肉バカに対し、俺はズカズカと間合いを詰め、ベッドの上のアルマの至近距離まで顔をぐぐっと近づけて凄んでみせた。
元・Sランクの修羅場を仕切ってきた男の覇気。
いつもなら泰然自若、何を言われても涼しい顔をしている最強の女剣士が、至近距離で睨み据えられた途端、瞳をわずかに泳がせて珍しく狼狽の色を見せた。
「……レ、レナリア……？」
「いいか、よく聞け。冒険者ってのはな、腕っぷしだけで完結する稼業じゃねぇんだ。お前みたいに規格外の実力を持った奴が『私はパン代があればいい』なんて舐めた査定を一度でも呑むと、奴らはそれを『相場』だと勘

違いして図に乗るんだよ」

俺は人差し指をアルマの鼻先に突きつけ、理路整然とした正論を淀みなく叩き込む。

「『あの凄腕の女剣士だってこの金額で納得したぞ』って前例が一つできちまえば、次に被害を食らうのは誰だ？命懸けで日銭を稼いでる後続の若い冒険者たちだろ。お前が安売りした分、業界全体の相場が崩れて他の奴らの首が絞まるんだ。お前のその無頓着な優しさはな、搾取する悪党を肥え太らせて、真面目にやってる同業者を殺す猛毒なんだよ！」

至極まっとうで、一切の反論を許さないプロとしての説教。

息を荒げて言い切った俺の顔を、アルマはまじまじと見つめたまま、完全に言葉を失っていた。

少しだけきょとんとした表情を浮かべたあと、瞳にはすとんと腑に落ちたような光が宿る。

そして、ベッドからするりと床へ降りると、長身を折りたたんで畳んだ両足の上に腰を下ろした。まさかの、見事なまでの正座だ。

「……そうだな。すまなかった、レナリア。私が浅はかだった」

「お、おい……そこまで畏まる必要はねぇよ。反省してくれりゃ、それでいいんだ」

「いや、お前の言う通りだ。自分の無頓着さが、結果として命懸けで戦う他の冒険者たちに迷惑をかけるなど、思い至りもしなかった……本当にすまない」

最強の女剣士が、小娘の姿をした相棒の前で深々と頭を下げる。そのあまりにも素直な態度に、こちらの怒気のやり場がなくなってしまう。

「……わかってくれりゃいいよ。ほら、顔上げてくれ」

俺が苦笑いしながら手を振ると、アルマはゆっくりと顔を上げた。
その白い頬は、夕焼けのようにじわりと朱に染まり、どこか気恥ずかしそうに視線を泳がせている。
「……なんだよ、その顔は」
「いや……こんな風に、私の間違いを本気で叱ってくれる人なんて、最近はずっといなかったからな。……なんだか、少し嬉しい」
「馬鹿言え。いい歳した大人になりゃ、他人に叱られる頻度なんて減るのが普通だ。むしろ立場上、人を叱る側になっちまうからな」
俺はふっと自嘲混じりに口元を緩め、腕を組んだ。
「だけどな……大人になってから、そうやって他人の説教を素直に受け止めて謝れる奴ってのも、滅多にいねぇよ。非を認めて即座に頭を下げられるだけ、お前はたいしたもんさ」
「……そうか」
アルマは安堵したように、ふうと胸を撫で下ろして息を吐いた。
「それに……俺だってお前には助けられたしな。あの場で大剣を抜いてくれなきゃ、今頃あの野郎どもにもみくちゃにされていただろうしよ……ありがとな」
男同士のカラッとした礼のつもりで、俺は軽く肩をすくめてみせた。
――だが。
その一言を聞いた瞬間、アルマの目が怪しく光を宿した。
「……もみくちゃ」
「……あ？」
「レナリアが……あの野郎どもに、もみくちゃ……か」

アルマがゆっくりと立ち上がり、長い脚で音もなく間合いを詰めてくる。
その心の奥に灯ったドロリと重い情熱の色に、俺の研ぎ澄まされた直感が、かつてないほどの警鐘を激しく鳴らし始めた。
「お、おい……アルマ？　なんだその目は……」
「あの男どもに胸を揉まれ、お尻を触られた時のレナリアの、あの甘い喘ぎ声……私の耳の奥で、まだずっと熱く響いているんだ」
「思い出すな！　あれは事故だ！」
「事故ではない。あんなにも可憐に啼いて……身体は火照っていないか？　あの下劣な男たちに触られたのだから、どこかに毒気が残っていたり、お前の身体に違和感があってはいけない」
真顔で至極もっともらしい理屈を並べ立てながら、アルマはすっと長い腕を伸ばし、逃げ場を塞ぐように俺を壁際へと追い詰めてくる。
「ま、待て、落ち着け！　何もない！　俺の身体は至って健全で――きゃわっ!?」
叫び声すら小娘の甲高い悲鳴に化けた刹那、俺の華奢な身体は、アルマの逞しい腕によってふわりと宙へ担ぎ上げられていた。
抗う間もなく、そのまま分厚いマットレスの中央へドサリと押し倒される。
「おい待て！　なんで押し倒――おい、なんで服を脱ぎ始めてんだ!?」
カチャリと外された留め具とともに、アルマの軽銀甲冑が無造作に床へ落とされた。
薄手のシャツを躊躇なく脱ぎ捨て、夕闇の中に晒される引き締まった肢体と、豊満な胸の圧倒的な質量。見惚れる暇もなく、ずっしりとした熱い体温が覆いかぶさってくる。
「だから私は、この身体と命のすべてでお前に報いなければならない」

「礼なら美味い飯を奢るとか、そんなもんでいいって言ってんだ筋肉バカ！　恩人を押し倒してどうすんだ！」
「恩人だからだ。それに、ほら。服の上からでもわかるぞ？」
アルマの体温の高い大きな掌が、俺のシャツの裾からするりと滑り込んできた。
冷気に晒された未発達な胸元。先ほど男に弄られ、まだ赤く熱を持っていた小さな突起を、アルマの長い指先がコリッと逃げ場のない正確さで挟み上げる。
「ひゃうんッ……!?　ふ、ぁあッ……！」
背筋を駆け上がる電撃的な痺れ。
触れられた瞬間、小娘の身体はビクンと弓なりに跳ね上がり、喉からあられもない嬌声が零れ落ちてしまう。
「ふむ……やはりな。これはいけない。感度が良すぎる」
アルマは蕩けるように目を細め、耳元へ甘く熱い呼気を吹き込んできた。
「指先で転がしただけで、こんなにも硬く尖って……下腹部の奥まで熱を帯びているのが伝わってくるぞ。このエッチにとろとろに発情したレナリアをおさめてあげるのも、相棒としての私の務めだな」
「と、とろとろとか言うな……ッ！　やめろ、乳首を……ひゃうっ、こりこりするなぁッ……！」
「口ではそう強がっても、身体はこんなにも素直じゃないか……今夜はたっぷり、その熱を私が鎮めてやるからな」
逃げ場のない指先が、尖りきった芯を意地悪く弾き、執拗に転がし続ける。
男の矜持をどれほど叫ぼうと、宿屋の薄暗がりには、甘く壊れた少女の喘ぎ声だけが果てしなく溶けていくのだった。

第二章

ギルドで商人どもから大金を巻き上げ、宿のベッドで散々アルマに弄ばれたあの日から二日後のこと。
朝の光が差し込む宿屋の一室で、俺は短弓の弦の手入れをしながら、テーブルの上に無造作に置かれた、ずっしりと重みを湛えた金貨の袋に目をやった。
……明らかにやりすぎた。
あんな公衆の面前で山のような金貨を巻き上げれば、いらぬやっかみを買うのは明白だし、力づくで奪い去ろうとするような浅ましい輩に目をつけられるリスクも跳ね上がる。
かといって、今さらあの商人に返しにいくわけにもいかないし、あのままギルドのカウンターに放置して誰かに持ち去られるのを見過ごすわけにもいかず、やむを得ず部屋まで持ってきてしまったのだが。
ため息を呑み込んで身支度を整え直していると、大剣を背負ったアルマが不意に声をかけてきた。
「レナリア、少し出かけてくる」
「あん？　なんだ、こんな朝早くから」
「何やら伝令鳩が来てな。急ぎの依頼があるそうだ。ギルドの別室で話を聞いてくる」
そう告げるアルマの横顔は、普段の能天気な笑みとはうって変わり、どこか神妙な影を落としていた。
不自然な違和感が、俺の胸の奥をチリリと撫でる。
「なら、俺も一緒に行くか？　契約の細かい条項でまたカモにされたら敵わねぇからな」
「いや、大丈夫だ……この話は、私だけで聞きたい」
「……そうか。わかった、じゃあ俺は日用品の買い出しでもしておくよ」

「あぁ、頼んだ」
短く頷き、アルマは部屋を出て行った。
扉が閉まる音を聞きながら、俺は細い顎に指を当てて眉をひそめる。
（……おかしいな）
普段のアルマなら、「聞き漏らすといけないから、交渉と調整はお前に任せたぞ」と真っ先に俺を頼ってくるはずなのだ。それほどまでに世俗の駆け引きに疎いあの筋肉バカが、俺を遠ざけて単独で依頼を受けに向かうなど、どう考えても裏がある。
「ちっ……世話の焼ける相棒だ」
俺は息を吐き出すと、すっと己の気配を殺した。
Sランクハンターとして渡り歩いてきた隠密の技術。腕力や瞬発力こそ小娘の器に落ちぶれてはいるが、足音を消し、呼吸を風に同化させる尾行術の真髄までは錆びついていない。
あの規格外の直感と野性を持つアルマにどこまで通用するかは賭けだったが、俺は建物の影や雑踏の切れ目を縫いながら、一定の間合いを保ってアルマの銀髪を静かに追っていく。

人混みの合間から時折見えるアルマの横顔は、やはりどこか硬く強張っている。普段の堂々とした歩様とは違い、周囲を気にしながら微かに眉根を寄せるその表情には、明らかな迷いと緊張が滲んでいた。
彼女が足を踏み入れたのは、朝だというのに紫煙と香水の匂いが淀む、怪しげな歓楽街の裏路地だった。
薄暗い店先や窓辺から、化粧崩れした娼婦たちがこちらを値踏みするように見つめ、ひそひそと囁き交わす視線が肌にチクチクと刺さる。こんな小娘が、弓を背負って朝の歓楽街をうろついていれば、奇異の目で見られるのも当然だ。俺はダボついた服のフードを深く被り直し、視線を切り捨てて足早に通り抜けた。

だが、その歓楽街の路地を抜けた先に広がっていた光景に、俺の足はピタリと止まる。

歓楽街の裏手に隣接する、悪趣味な装飾が施された豪壮な貴族街。

アルマの足は迷うことなく、その一角に佇む高い鉄柵に囲まれた豪邸の門へと向かい、静かに敷地の中へと吸い込まれていった。

（あそこは……この間、酒場で全財産を巻き上げてやったあの商人の屋敷じゃねぇか……!?）

最悪の胸騒ぎが背筋を一気に駆け抜ける。

ギルドの急ぎの依頼など大嘘だ。奴らの息のかかった黒幕が裏で糸を引き、アルマを単身おびき寄せたに違いない。

「おい、アルマ――」

咄嗟に声をかけ、門へ向かって駆け出そうとした、まさにその時だった。

「はーい、子猫ちゃんのお散歩はここまでよ」

背後の闇から、甘い香油の匂いとともに艶めかしい女の声が耳元へ直接滑り込んできた。

振り返る暇すら与えられず、湿った絹の布切れが俺の口と鼻を背後から強引に覆い塞がれる。

「むぐっ……!?　ん、んんぅ……ッ！」

甘美で暴力的な痺れ薬の芳香が、肺の奥まで一気に染み渡る。

抵抗しようと腕を払おうとしたが、手足からは急速に力が抜け、視界がチカチカと白く明滅していった。

薄れゆく意識のなかで、女の声がする。

「ふふ、いい子ね……大人しくしていれば、極上の悦びを教えてあげるわ」

―――――――

冷たい床の感触と、鼻腔を突く重たい紫煙の臭いで目を覚ました。
ぼんやりとした視界のなか、厚手のカーテンの隙間から差し込む光の向こうに、見覚えのある極彩色の塔がちらりと覗いている。さらに耳を澄ませば、微かに漏れ聞こえてくるのは客引きの嬌声と、下品な男たちの笑い声。

（ここは……歓楽街……いや、あの塔の位置からすると、娼館の離れか……？）

重厚な扉が固く閉ざされた密室。
手を縛られ、毛足の長い深紅の絨毯の上へ無様に転がされていた俺を見下ろしていたのは、息を呑むほど妖艶な美女だった。
深紅の絹ドレスから覗く豊かな胸元と、蠱惑的な光をたたえた切れ長の瞳。
こいつの名は知っている。街のギルド幹部や豪商どもが夜な夜な大金を積んで通い詰め、裏の交渉事を密かに取り仕切っていると噂される高級娼館。その筆頭娼婦、カミラだ。
「……くそっ、離せ……っ！」
「あらあら……威勢がいいのはお口だけかしら、可愛いお嬢さん？」
カミラは煙管を灰皿へと置くと、絹のドレスを艶めかしく揺らしながら音もなく立ち上がり、俺の前へと優雅に膝をついた。
すっと伸びてきた細く手入れの行き届いた指先が、俺の顎を強引に持ち上げる。

「……どうせあの脂身商人野郎どもの差し金だろ。趣味の悪いお出迎えだな」
俺は毅然と睨みつけ、低い声を喉の奥から絞り出したつもりだった。
だが、薬の混じった煙で呼吸が乱れているせいもあり、喉から漏れ出たのは拍子抜けするほど甲高く、どこか甘ったるい掠れ声だ。
その強がりを可笑しそうに見つめながら、カミラはふーっと甘く重たい紫色の煙を、至近距離から俺の顔面へと吹きかけてきた。
「ゲホッ……っ！　な、何を……」
「ふふっ、差し金だなんて人聞きの悪い……これはね、私からあの商人様へご提案させていただいたのよ」
「……なんだと？」
煙を払おうと顔を背ける俺の耳元へ、カミラは紅い唇を寄せて妖しく囁いた。
「『あの生意気な子猫ちゃんに一泡吹かせたくありませんか？　お手伝いさせていただきますよ』……ってね」
カミラは愉悦に目を細めると、俺の頬をすっと指先で撫で下ろした。
「この間、うちのお得意様の旦那方を酷い目に遭わせてくれたそうじゃない？　ギルド規約を盾にした見事な舌戦だったって聞いたわよ。でもねぇ、ちょいと派手にやりすぎちゃったんじゃないかしら？」
あざ笑うように紅い唇を歪め、カミラは首をかしげる。
「ま、あの旦那たちがどうなろうと正直知ったことじゃないけど。でもね、本来うちに落ちるはずだった大金を巻き上げて恥をかかせられたら、私たち裏稼業も黙ってはいられないってわけ。どれほど頭が回ろうと、そんな頼りない身体じゃこの街の世渡りはできないのよ」
「離せ、色町の雌狐が……っ！　俺に触るな！」
「男みたいな口の利き方をするのね。でも……身体は嘘をつけないわよねぇ？」

細い指先が、ダボついたシャツの襟元へと躊躇なく滑り込んできた。
抗おうと身を捩った瞬間、背後から控えていた二人の女中が組み付き、俺の両肩と後ろ手に縛られた腕を拘束される。小娘の貧弱な筋力では、押さえつけられただけで身体ひとつ動かせない。
「な……っ、やめろ……ッ！」
「生意気な小娘にはね、小難しい理屈を叩き込むより……女の快楽で頭の芯まで空っぽにさせてあげるのが、一番手っ取り早いお仕置きなのよ」
冷たい空気が、捲り上げられたシャツの隙間から滑り込み、剥き出しの肌を撫でた。
冷気に晒され、キュッと小さく硬直し始めた先端を、カミラの体温の高い指の腹が、円を描くように優しく、けれど逃げ場のない正確さで撫で回し始める。
「ひゃっ……!?　ん、く……っ！」
男としての魂の抵抗をあざ笑うかのように、過敏な小娘の肉体は甘い痺れを覚え、意に反した熱い吐息が喉の奥から漏れ出していった。
「ひゃうんッ……!?　ふ、ぁ……っ！」
背筋を駆け上がる鋭利な痺れ。
泉の呪いと、アルマの手ほどきによって異常なまでに研ぎ澄まされてしまった神経が、プロの娼婦の手慣れた刺激に瞬時に反応してしまう。
「あら、たったこれだけで、こんなに可愛い声を漏らすの？　ずいぶんと素直に仕上がっているじゃない」
カミラは細い指先でシャツの前布を器用に引き裂くように広げ、両脇を押さえる給仕たちに合図を送る。
有無を言わさぬ手際で上着が剥ぎ取られ、未発達でわずかに膨らんだだけの白い胸元と、すでに冷気と羞恥で小さく尖りきった紅い乳首があらわになった。

「や、やめろ……っ！　服を着せろッ！」
必死に身をよじって叫ぶが、この細腕では抗うことすら叶わない。
そんな俺の無様な抵抗を見下ろし、カミラは妖しく目を細めて艶めかしく笑った。
「元気な子猫ちゃんね。でも、そんな威勢のいい子ほど……乳首をちょちょっとこねくり回してあげれば、すぐに大人しく甘えてくるものなのよね」
細長い指を宙でついついっと怪しげに蠢かせながら、カミラは俺の胸元へと顔を寄せてくる。
「あんたみたいな敏感すぎる小娘、乳首を弄ってあげるだけで簡単にイカせることができるのよ……一流娼婦の腕前、たっぷりと骨の髄まで味わいなさい？」
「ふざけ……っ、やめろ、触るなぁッ！」
絶叫する俺の胸元へ、カミラの指先がそっと舞い降りた。
だが、その指先は直撃を狙うのではなく、先端の突起を絶妙に避けながら、膨らみの輪郭や鎖骨の下、脇に近い柔らかな皮膚を、まるで鳥の羽根で撫でるような繊細極まるフェザータッチで這い回る。
（な、なんだこれ……っ⁉　触られてるのか触られてないのかすら、よくわからないのに……っ！）
直接触れられないからこそ、意識のすべてが胸元へと強制的に集約されていく。
焦らしに焦らされ、撫でられた皮膚からジリジリと熱が立ち上り、中心にある突起へと神経が過敏に研ぎ澄まされていくのが分かった。
早くそこを触ってほしいと肉体が勝手に飢え始めるような、恐ろしいもどかしさに頭の芯が痺れていく。
「ひ、あ……っ！　な、んで……そこ、避けるんだよ……っ！　じれったい、やめろぉッ……！」
心では拒絶しているはずなのに、口からこぼれるのはもどかしさに狂いそうな小娘の喘ぎ声。
カミラはその乱れた呼吸を愛でるように微笑み、極限まで充血しきった先端のすぐ際を、爪先でチリリと掠め

るように撫で回した。
「あ、ぁあッ……！」
脳天が真っ白に弾け飛ぶような衝撃。
抗う意志を嘲笑うように、俺の身体はビクンと弓なりに跳ね上がり、呼吸が熱く乱れていく。
「くすくす……乳首が切ないでしょう？　こうして周囲からじわじわ攻めていくとね、敏感な芯に感度がどんどん集まってくるのよ……？　ねぇ、触ってほしい？　可愛くおねだりしたら、直接触ってあげてもいいわよ？」
「ふざ……けんな……ッ！　誰が、お前なんかに……っ！」
涙目で睨みつける俺の強がりを、カミラは愉悦に満ちた目で受け流す。
「ふふっ、強情ね。じゃあ、もっともっと焦らしてあげる」
再び始まる生殺しの拷問。
触れるか触れないかの絶妙な吐息と爪先が輪郭を弄び、先端への飢餓感ばかりが極限まで跳ね上がっていく。
触れられないもどかしさに脳が焼き切れそうになり、奥歯がガタガタと情けなく震えだした。
そんな俺の顔を覗き込み、カミラは甘く優しい猫なで声を落としてくる。
「我慢して可哀想に……ねぇ、頭がぐちゃぐちゃになって、もうイキたいんじゃない……？」
トロリとした甘い囁きに意識が蕩けそうになった、まさにその瞬間だった。
カミラの瞳からふっと甘さが消え、耳元へと冷たく鋭い囁きが突き刺さる。
「さっさと、逝け。このメス猫」
「ひっ……!?」
直後、カミラの左右の指先が極限まで張り詰めていた両方の乳首を同時に強く、パチンと激しく弾き上げた。
「ひゃあぁぁぁぁッツ――!?!?」

背筋を突き抜けた暴力的な快楽の雷撃に、喉が張り裂けんばかりの絶叫が迸る。
胸の先端から全身へと一気に快感が吹き荒れ、背中を大きく反らした肉体はビクンビクンと無様に跳ね上がって激しく痙攣した。
ただ胸の突起を弾かれただけで、俺の肉体はあっけなく絶頂へと叩き落とされたのだ。
激しい喘ぎとともに床へへたり込む俺を見下ろし、カミラは妖艶に紅い唇を吊り上げた。
「ふふっ。屈辱の乳首イキ、おめでとう……可愛い子猫ちゃん」
絶頂の余韻で荒い息を吐く俺の胸元に、カミラは再び細い指先を這わせた。
カチカチに尖りきったままの紅い突起を、親指と人差し指の腹で優しく挟み込み、くにくにと円を描くように転がしながら艶然と囁きかける。
「あんなに生意気なことを言っていても、ここはこんなにも硬く尖って……私の指を欲しがっているわよ？　ほら、下はどうかしらね」
「ま、待て……っ！　下は……下だけは、触るな……ッ！」
懇願めいた悲鳴が喉から転がり出るが、カミラの無慈悲な手は止まらない。
細身のズボンの留め具が器用に外され、下着ごと強引に膝下まで一気に引き下ろされる。
背後に控えていた二人の女中が俺の華奢な身体を両脇から力任せに抱え上げた。
宙に浮いた身体を床の上へと仰向けに寝かせられ、両脚を左右へ大きく割り開かれる。膝を外側に曲げられたまま、体重をかけて床へと力づくで押さえつけられた。
手で縛られたまま、完全に無防備な格好で秘所を天へと晒す体勢に固定されてしまう。小娘の貧弱な力では、どれほど身をよじってもびくともしない。
冷たい部屋の空気に晒された秘所。

そこは、胸を弄ばれた屈辱の熱さだけで、すでにじわりと蜜を滲ませ、淫らに艶めいていた。
「まぁ……なんてふしだらな身体。まだ指一本入れてもいないのに、こんなに濡れそぼって……」
「ちが……っ、それは……っ！　俺の、意思じゃ……あんッ!?」
弁解は、カミラの熱い舌先が、もっとも敏感な突起の皮を割り開いて直接舐め上げられたことで、あられもない絶叫へと掻き消された。
「ひゃあぁぁッ――!?　や、だ……っ、舌っ、直接は……らめぇぇッ!!」
「ちゅ……ジュルッ……ふふ、いい啼き声。頭のいいフリをしていても、身体はただの淫乱な小娘そのものじゃない」
熟練の舌使い。
尖りきった芯をチロチロと転がされ、時折強く吸い上げられるたびに、下腹部の奥底が暴力的なまでの熱さで疼き狂う。
頭の芯では、「屈するな、耐えろ」と激しく怒号を上げている。
だが、この肉体は完全に雌の歓喜に呑まれ、カミラの頭を両太ももで無意識に挟み込もうと震えていた。
「あ……っ、ダメ……っ、変になる……っ！　頭が、溶けちゃうからぁ……っ！」
「溶ければいいのよ。全部忘れて、気持ちいいだけの雌ネコにおなりなさい」
ぬるりと蜜を纏った二本の指が、狭く熱い奥底へと容赦なく沈められた。
「ひぎぃッ……!?　あ、あぁぁーーーッッ!!」
内壁の過敏な天井をぐりぐりと押し上げられる破壊的な快楽が、容赦なく俺の身体を貫いた。
身体が弓なりに跳ね、熱い雫が床に敷かれた絨毯を湿らせる。
だが、荒い呼吸を整える間もなく、カミラはふっと冷ややかな笑みを浮かべ、濡れた指を奥底からするりと引

き抜いた。
「ふふ、指先だけでこんなにあっけなく果てちゃうなんて、本当に可愛い小娘ね……でも、旦那方をコケにした落とし前としては、まだまだ生ぬるいわ。とっておきの上等なオモチャを用意してきたのよ」
カミラが懐から取り出したのは、薄桃色の光を妖しく放つ卵型の水晶と、精緻な銀細工が施された二対の小さなクリップだった。
「な……んだよ、それ……っ」
「これは【魔導吸引具】と【共鳴水晶】。夜の街で特別に扱われる、贅沢なお仕置き道具よ」
カミラは迷いなく、冷たい銀のクリップを俺の未発達な胸の先端、赤く腫れ上がった小さな突起へとあてがった。
カチリ、と小さな機構音が鳴った瞬間、クリップの内側から吸い付くような陰圧が発生し、敏感な先端が逃げ場なくギュウッと強く吸い上げられる。
「ひゃうんッ!?　な、にこれ……吸われて……っ、痛っ、いや……ッ！」
「痛いのは最初だけよ。ほら、体温に馴染むと、脈打つように吸い上げ続けてくれるわ。……そして、下にはこれよ」
カミラの長い指先が、蜜で濡れそぼった俺の奥底へと、淡く発光する滑らかな共鳴水晶を押し込んできた。
ぬるりとした異物感が、狭く熱い内壁を押し広げながら最奥へと沈み込んでいく。
「やめ……っ！　出せ……っ！　そんなもの、入れ……あぁッ！」
「ふふ、奥にすっぽり収まったわね。さぁ、ここからが本当のお仕置きよ」
カミラが細い指に嵌めた銀の指輪を軽く擦った。
その瞬間、俺の奥底に沈められた水晶が、ブブブと細かく唸りを上げながら激しく拍動を始めた。

「ひぎゃあぁッ!?　ん、あぁッ……！　奥が……震えて……っ、ぐちゅぐちゅ、擦れるぅッ！」
「あら、良い啼き声。この指輪を回すたびに、水晶の拍動が強くなるのよ」
胸の先端は持続的に強く吸い上げられ、下腹部の奥底では自律して暴れる水晶が過敏な肉壁を逃げ場なく抉り続ける。
二重の暴力的な快楽に、俺の男の理性が悲鳴を上げた。
（屈してたまるか……！　こんな色町のオモチャに、俺が……修羅場を潜った俺の魂が、折れるわけが……ッ！）
俺は奥歯が砕けんばかりに噛み締め、下腹部にぐっと力を込めて快楽の波を押し返そうと抵抗した。
だが、その必死の抵抗こそが、最悪の罠だった。
「あらあら……我慢しようと力むほど、水晶を締め付けて自分で奥を擦っちゃってるわよ？」
「なっ……!?　ぐ、あ……っ！」
「ふふ、身体を強張らせれば強張らせるほど、内側の壁が水晶に吸い付いて、より深く擦り合わされるの……ほら、自分の力で奥を抉って、どんな気分かしら？」
カミラの冷酷で皮肉めいた囁きが、耳元に滑り込む。
言われた通り、力を入れれば入れるほど、水晶の細かな振動が過敏な天井を強烈に押し潰し、電気のような快感が脊髄を駆け上がっていく。
「や、だ……っ！　止まら……っ、い、いっちゃう……っ！　あぁぁーーッッ!!」
耐えきれず、二度目の激しい絶頂が俺を襲った。
全身がビクビクと激しく跳ね上がり、涙と涎が頬を伝って床へ零れ落ちる。
「はい、二回目。でもまだまだ終わらせないわよ」
カミラは嘲笑うように指輪の魔力を一度絞った。水晶の振動が止まる。

そして、床で喘ぐ俺を冷たく見下ろしたまま、すっと視線を背後の女中たちへと向けた。
「あなたたち、その生意気な子猫ちゃんを立たせて、あの水晶玉がよく見えるようにしてあげてくれる？」
「畏まりました」
女中たちは抑揚のない声で静かに応じると、俺の両脇に手を差し入れ、力任せにぐいと身体を引き起こした。
急激に立ち上がらされた衝撃で、胸元に取り付けられた乳首のクリップが重力に従って小さく揺れる。
「うあっッ……!?　あ、やめ……っ！」
引っ張られるような鋭利な痺れに、俺は情けなく身体を震わせ、涙混じりの泣き声を喉の奥から絞り出すことしかできない。
そんな無様な姿を眺めながら、カミラは部屋の中央の飾り台に置かれていた大きな水晶玉を手元へと引き寄せた。
「うふふ……ねぇ、あなたの相棒の剣士、今どうしているか見たいかしら？」
カミラが水晶の表面を妖艶な指先で撫でると、青白い魔力の光が部屋の白壁へとパッと投射された。
映し出されたのは、屋敷の豪華な応接間の光景。
そこには立派なソファーに腰掛けて会話をする、あの肥満体の商人と、大剣を傍らに置き真剣な面持ちで話を聞いているアルマの姿だった。
「ア……ルマ……っ!?」
壁に投影された青白い光のなかで、アルマの姿が克明に揺らめいていた。
水晶玉から微かな魔力のノイズとともに、応接間の生々しい肉声が部屋に響き渡る。
『先日は大変失礼しましたな、アルマ様。あの粗相の数々、何卒ご容赦を……本日はそのお詫びも兼ねて、貴方様にふさわしい破格の依頼をお持ちした次第でして』

この間は無様に失禁して床を這いつくばっていたあの商人が、揉み手をして卑屈な笑みを貼り付けている。
だが、その視線の奥底には、毒蛇のような冷たい悪意がぎらついていた。
『……死の迷宮『奈落の古城』、か』
重厚な革張りのソファの前に立ち、アルマは差し出された羊皮紙の依頼書を琥珀色の瞳で見下ろしていた。
『ええ。数多の冒険者を呑み込んできたかの古城……幾重もの階層を成し、地下深くへと果てしなく続く巨大迷宮でございます。その最深部に眠る秘宝の回収をお願いしたいのです。もちろん、報酬は破格のものをご用意しておりますぞ』
商人が合図を出すと、従者がずっしりと重たい革袋をテーブルの上へ運んできた。
ドサリ、と鈍い金属音を立てて置かれた袋の口からは、眩いばかりの金貨が溢れ出している。
『今回は特別に、この金貨は前払いとさせていただきます』
『前払いだと？　……ギルドの規約でもそんな前例は聞いたことがない。怪しすぎるな』
アルマが警戒を露わにして眉をひそめると、商人は脂ぎった顔にわざとらしい揉み手を添えて取り繕った。
『いえいえいえ。それだけ屈指の剣士たるアルマ様を信用している証拠でございますよ』
そして商人は、卑屈な笑みを貼り付けたまま、ふっと口角を吊り上げて笑った。
『それに……アルマ様も充分にご存じかとは思いますが、あそこにはあの『刀』が眠っております。貴方様がずっと探し求めておられる、あの品を……ぜひとも取ってきていただきたいのです』
商人の意味深な言動に、アルマの表情がわずかに凍りつく。
『……貴様、私の過去を調べたのか？』
『いえいえ！　滅相もございません、ただの偶然でございますよ。はい』
白壁に映し出されるその光景に、俺の冷徹な思考が警鐘を乱打する。

過敏になった肉体を快感で甘く蕩かされ、頭の芯が痺れながらも、俺は必死に意識をその危険極まりない取引へと張り巡らせていた。

（おい……アルマ……！　乗るな、そいつはあからさまな罠だ……！）

どれだけ相手を信用していようと、あの強欲な商人どもが取引前に大金を前払いで渡すなど、天地がひっくり返ってもありえない。搾取と騙し合いが日常茶飯事のこの裏社会で、そんな虫のいい話が転がっているはずがないのだ。

理性を振り絞り、壁の映像へ向けて警告の声を張り上げようとした。

だが、まさにその瞬間――。

「あら、相棒の姿に夢中かしら？　こっちにも集中してくれないと困るわね」

カミラが妖艶に微笑み、俺の胸元に取り付けられた吸引クリップを指先でツンと小突いた。

同時に、下腹部を締め上げる共鳴水晶の回転が、微かにギアを上げる。

「ひゃうッ……!?　ん、ぁ……っ、触るな……っ！」

思考を塗りつぶすように駆け上がる電流のような快楽に、叫びは無残にも甘い嬌声へと呑み込まれていった。

電撃のような痺れが腰を直撃し、口から出かかった警告はあられもない甘い掠れ声へとすり替えられてしまう。

壁の向こうでは、そんな俺の醜態など知る由もないアルマが、しばしの重苦しい沈黙ののち、静かに羊皮紙を突き返していた。

『……断る。私は旅の途中だ。このような話に付き合う義理はない』

相変わらず世俗の金や権力に執着のない、澄み切った拒絶。

（よし……それでいい、アルマ……）

俺が安堵の息を吐きかけた――まさに、その刹那だった。

カミラがにやりと、獲物を罠に追い詰めた肉食獣のような笑みを浮かべて俺を見下ろした。
「さぁあなたたち。その子猫ちゃんを持ち上げてあげて。そう……つるつるのあそこが、向こうから丸見えになるように、ね」
女中たちが無言で動き、俺の両脚を抱え上げて宙へと大きく開かせた。
さらに背後の拘束が解かれたかと思うと、自由になったはずの両手首を女中たちの頑丈な手にがっしりと頭上へと掴み止められる。
なぜわざわざ拘束を解いて体勢を変えさせるのか。そう訝しんだ時には、もうすべてが遅かった。
壁の向こうで、商人は焦る様子もなく、脂ぎった唇の端をこれ以上なく下品に吊り上げた。
『おや、断られますか……ですが、相棒のお嬢さんの命がかかっていても、同じことが言えますかな？』
『……なに？』
アルマの瞳から、一瞬にして光が消え失せる。
水晶越しにすら肌が粟立つほどの殺気が空気を軋ませていた。
直後、商人が懐から別の小型水晶を取り出し、机の上にトンと置く。
その瞬間、応接間側の空間にも魔力の光がパッと結ばれた。
アルマの鋭利な視線が、魔術回線を通して真正面から——下半身を剥き出しにされ、つるつるの秘所をオモチャで嬲られながら無様に晒されている俺の姿と、まっすぐに衝突した。
（おい、まさか……ッ!?）
俺の喉が恐怖と羞恥で完全に凍りつく。
双方向の中継だと察した瞬間には、すでに最悪の幕が上がっていた。
『な……っ』

アルマの息が止まった。
いつもは涼しげで飄々としているその美貌が、一瞬にして凍りつく。
「うふふ。商人さん、ご無沙汰しております。そしてアルマちゃーん、こんにちは」
カミラが艶然と微笑み、中継の光に向かって優雅にひらひらと手を振る。
『レナ……!?』
水晶の向こうから、かつて聞いたこともないほど激しく動揺したアルマの叫びが部屋に響き渡った。
最強の女剣士の取り乱した姿を前に、カミラは極上の愉悦に喉を鳴らし、これ見よがしに俺の濡れそぼった太ももに手を添える。
水晶の向こうから商人のにやついた声が聴こえる。
『カミラという極上の娼婦がおりましてな。あの小娘は今、歓楽街の別棟で、女の悦びを骨の髄まで教え込まれている最中です。あのまま放っておけば、頭の芯まで快楽で蕩けて、二度とまともな口も利けないただの淫売に成り果てるでしょうな』
『貴様ぁっ……！　レナに何をしている！　そこはどこだ、レナァッ!!』
激情に駆られたアルマが画面の向こうで怒号を上げるが、カミラはふふっと鼻を鳴らし、妖しく目を細めた。
「可愛いレナちゃんはねぇ、今私の横で、絶賛犯され中でーす」
うふふっと妖艶に笑うカミラ。
「それでは、せっかく中継がつながっていますのでー……アルマちゃんのために、レナちゃんの可愛らしい絶頂声とお顔を、特等席でお見せしましょうね」
カミラが指輪に指を滑らせ、再び強烈な魔力を水晶玉へと一気に送り込み始めた。
奥底に沈められた水晶の拍動はさらに苛烈さを増し、胸と下腹部のクリップも連動してジュウジュウと先端を

強く吸い上げ、硬く尖った芯を限界まで引き絞る。
「ひぁあぁぁッ!?　ま、待て……っ、休みを……っ、息が、できないぃッ！」
「休ませるわけないでしょう？　生意気な口を利いた罰よ。頭の芯がトロトロに溶けて、女の悦び以外何も考えられなくなるまで啼き続けなさい」
「あ、あぁぁッ！　もう、ダメ……っ、抜いて……っ、抜いてぇぇッ！」
「あら、さっきまでの男勝りな凄みはどうしたのかしら？　ほら、もっと可愛くおねだりしてみなさいな」
激しい振動に奥を抉られ、胸を責め立てられる二重の責め苦に、俺の荒い息は途切れ途切れにしか続かない。
だが、カミラは冷酷な笑みを深めると、蜜で濡れそぼった俺の太ももをさらに大きく押し広げ、視線をその中心へと落とした。
「あら……下半身のここ、ぷっくりとした一番過敏な突起を忘れていたわね。奥の水晶と連動して、ひくひくと震えて……なんだか取り残されて可哀想じゃない？」
そう言ってカミラが懐から取り出して見せたのは、胸につけられたものよりも一回り小さく、精巧な銀細工が施されたもう一つの吸引クリップだった。
銀の冷たい光が、妖しく俺の瞳に映り込む。
「ほら……これ、ここにもつけてほしいかしら？」
「や、やめろ……っ！　そこだけは……頼むから、やめてくれ……っ！」
プライドもかなぐり捨て、涙で滲む視界の中で首を激しく横に振って拒絶する。
だが、カミラは極上の愉悦に満ちた花のような笑みを浮かべ、甘い声で残酷に告げた。
「ふふ、そうよね。そういうと思ってたから……ちゃんとつけてあげるわね」
「ひっ――!?」

無慈悲な指先が、ぷっくりと充血して張り詰めた突起の薄皮を優しく左右へ割り開き、剥き出しになった極小の芯へと、冷たい銀のクリップをカチリと噛み合わせた。

瞬間、作動し、剥き出しの最過敏部がジュウッと暴力的な陰圧で一気に吸い上げられる。

「ひぎゃあぁぁーーーーッッ!?!?あ、あぁぁッ、直は……直で吸うなぁぁッッ!!」

部屋中に響き渡る、これまでにないほど甲高く引き裂かれた絶叫。

逃げ場のない吸引が尖りきった芯を限界まで引き絞り、奥底の水晶の激震と胸のクリップが同時に共鳴して、俺の神経を焼き尽くすような破壊的快楽が全身を駆け巡った。

「あはっ、最高よ子猫ちゃん！　ほらアルマちゃん、商人さん、見ていらっしゃるかしら？」

カミラは水晶の光へ向かって甘やかに声を張り上げ、見せつけるように俺の太ももをさらに大きく割り開いた。

「この子のここ、もう大洪水よ。奥の水晶がゴリゴリ蠢くたびに、くちゅくちゅと情けない水音を立てて……ほら、蜜が溢れて床までしたたり落ちているわ。身体中がピクピク痙攣して、まるで熱いおねだりをしているみたい」

『貴様……っ！　今すぐレナから手を離せ!!』

水晶の向こうでアルマが怒声とともに大剣の柄を握りしめ、商人は下品に脂汗を拭いながら喉を鳴らして画面に釘付けになっている。

見られている。敵にも、そしてアルマにもこんな破廉恥極まりない姿をリアルタイムで晒されている。

その事実が、男のプライドをずたずたに引き裂いた。

（声……ッ、出すな……！　これ以上、アルマの前で……情けない声を……ッ！）

俺は必死に喉の奥で嬌声を押し殺そうと耐えた。

だが、その健気な抵抗をカミラが見逃すはずもなかった。

「あらあら、相棒に見られて恥ずかしいのかしら？　可愛いお口をぎゅっと結んで我慢しちゃって……でもね、そんなの許さないわよ」

カミラの妖しい爪先が、胸元で限界まで張り詰めた吸引クリップの縁を、ピンッ、ピンッと意地悪く弾いた。

「ひゃうんッ!?　ふ、ぁあッ……！　んくぅうッ！」

「ほら、弾かれるたびに先端がビリビリ痺れて、お腹の底がキュンって跳ねるでしょう？　我慢なんてしないで、アルマちゃんに聞かせてあげなさいな。自分がどれだけ気持ちよくなっちゃってるか！」

「や、め……っ！　ピンピン、弾くなぁッ……！　あぁッ、んぁあッ!!」

突起を直接吸い上げられながら、胸の先端を執拗に弾かれる波状攻撃。

限界を迎えていた刺激の奔流に、耐えようとした堤防は一瞬で決壊した。

「ほら、見てごらんなさい！　爪先までピンと伸ばして、内壁で水晶をぎゅうぎゅう締め上げながら……レナちゃん、またイっちゃうわよ！」

「あ……っ、ダメ……っ！　もう、頭が……っ、アルマ、見るなっ！　見ないでぇえッ――!!　あ、あぁぁぁ――――ッッ!!」

部屋を揺るがすような絶叫とともに、全身が激しく弓なりに跳ね上がった。

止めどなく溢れ出る蜜と、激しい痙攣。

理性を完全に焼き切られた俺は、中継の光の向こうで凍りつくアルマの視線を受け止めながら、ただ無様に快楽の濁流へと沈み堕ちていく。

「くすくす……あはっ、なんてみっともなくて下品な顔かしら。あの強がりの小娘ちゃんはどこへ行っちゃったの？　瞳はとろんと蕩けて焦点も合ってないし、唇の端からは涎を垂らして、まるで快楽をねだる発情期の牝ネコそのものよ」

荒い息とともに無様に震える俺を見下ろし、カミラは愉悦に喉を鳴らしながら容赦ない言葉責めで嘲笑った。

そして、手元の水晶玉を優雅に持ち上げると、中継の向こうの商人へ向けて艶然と微笑みかける。
「商人様、このようなのはいかがでしょうか？　この可愛い子猫ちゃんの極上の表情をもっとじっくりと堪能していただきたいと思いまして」
カミラが指先で水晶を操り、光の焦点を俺の至近距離へとぐっと寄せる。
画面いっぱいに、快楽の余韻に打ちのめされ、涙と涎にまみれて頬を紅潮させた俺の無防備な顔面が大きくクローズアップされた。
「ほらレナちゃん、商人様にごめんなさいは？　『生意気なお口をきいてごめんなさい』って、可愛く謝ってごらんなさいな」
「や、だ……っ！　そんな、こと……っ、誰が言うか……ッ！」
荒い息の下から、意地を振り絞って唾を吐き捨てるように拒絶した。
だが、その強がりを待っていたかのように、カミラが指輪をさらに一段階、冷酷に捻り上げる。
「あら、まだお口が達者なのね……お願い、もっと苛めてあげて」
カミラの合図とともに、俺の両腕を押さえつけていた女中が下卑た笑みを浮かべ、胸元に噛み付く吸引クリップの縁をピンッ、ピンッと爪先で小刻みに弾き始めた。
奥底の水晶が唸りを上げて激震し、胸の突起が弾かれるたびに、電撃のような快感が脳天をダイレクトに貫く。
「ひゃぁあッ⁉　あ、んぁッ、やめ……っ！　弾くの、やめろぉおッ……！」
だらしなく開いた口から甘い嬌声が際限なく零れ、焦点の合わない瞳からボロボロと大粒の涙が溢れ出す。
そんな俺の乱れた様子を至近距離から観察し、カミラは意地悪く目を細めて喉を鳴らした。
「あら、身体を震わせて……またイキそうになっているんじゃないかしら？　ふふ。見てもらいましょうか。この子猫ちゃんの、すっごく無様で哀れなイキ顔を」

「や、やめ……っ！　それ以上は、もう――」
「ほぉら、しっかり顔を上げなさい」
カミラは情け容赦なく、秘所のクリップを指先でぐいっと強く引っ張り上げた。
張り詰めた神経をダイレクトに引き絞られる強烈な衝撃が下腹部を貫き、俺の意識は一気に臨界点へと引きずり上げられる。
「ひゃあぁぁぁツ――!?!?　あ、ぎ、いいッ……！　ら、めぇツ、もう、いひッ、いくぅぅうツ……!!」
白目を剥きかけた視界が真っ白に弾け飛ぶ。
完全に呂律の回らなくなった下品な喘ぎ声を撒き散らしながら、引き絞られた身体が弓なりに反り返って激しく痙攣した。
止めどなく溢れる熱い飛沫が床を濡らし、舌をだらりと垂らしただらしのない絶頂の表情が、拡大された水晶の中継画面越しに余すところなく晒し上げられる。
『フォッ、フォッ、フォッ！　こいつはたまらん、実に見事な牝の顔だな！』
中継の向こうから、商人の下品極まりない哄笑が響いて耳朶を打つ。
快楽の濁流に溺れ、もはや抗う力すら残されていない俺の耳元へ、カミラは愉悦に満ちた声を忍ばせてくすくすと笑った。
「ふふっ……見られて感じちゃったのかしら？　本当にしょうがない変態さんね。ほぉら、恥ずかしいお顔が何度も見られちゃうわよ？　早く謝罪したほうが楽になれるんじゃないかしら？」
耳元で囁かれる甘い悪魔の声と、休む間もなく全身を焼き尽くす刺激の奔流。
これ以上、アルマやあの豚どもの前で醜態を晒し続ける屈辱に耐えきれず、俺の男の誇りは音を立てて崩壊した。

「ご……っ、ごめ……っ！　ごめんなさい!!　生意気な口きいて……っ、ごめんなしゃいぃッ……！」
舌の回らない、みじめな泣き声での謝罪。
それを中継越しに見ていた商人は、腹を抱えて下品な哄笑を響かせた。
『ワッハハハハ！　素晴らしいぞカミラ！　あの生意気な小娘が、涙目でこんな無様な面を晒すとはな！　痛快だ、実に痛快だよ！　またお前の店をたっぷり贔屓してやるからな！』
「うふふ、ありがとうございます、商人様」
カミラが優雅に一礼する横で、俺は燃えるような羞恥から顔を背け、両手で顔を覆い隠そうと必死にもがいた。
だが、女中たちに両腕をきつく床へ縫い止められたままでは、指先ひとつ顔に届かない。
ただ無力に宙に浮かされ、涙と屈辱に濡れた表情を晒し続けることしかできなかった。
痙攣する身体に、水晶側の声がかすかに届く。
商人は下品な笑い声を響かせ、アルマの反応を愉しむように中継の水晶を指差した。
『さぁアルマ殿。小娘を助けたければ、その依頼書にサインをして古城へ向かうことですな。さもなくば――』
商人の下卑た笑い声は、最後まで紡がれることはなかった。
アルマの纏う気配から、一切の人間味が消え去っていたからだ。
瞳は光を完全に失い、底知れぬ虚無と殺気をたたえている。
美しい横顔は氷のように冷たく引き攣り、額に浮き出た青筋と、裂けそうなほど固く結ばれた唇が、内に秘めた凶暴な怒りを無言で物語っていた。まるでこの世のあらゆる命を塵芥として切り捨てる魔神のような形相。
『……なるほど。状況は理解した』
『ひっ……!?　あ、あ……っ』
ただ静かに落とされた一言に込められた重圧だけで、商人は息を詰まらせ、喉を恐怖で引きつらせた。先ほど

までの傲慢さは跡形もなく消え失せ、脂汗を滝のように流しながら、腰を抜かしてソファへとしがみつく。
そして、その尋常ならざる殺気の余波は、魔術水晶を介してこの密室にまで冷気となって伝播していた。
先ほどまで嗜虐的な笑みを浮かべていたカミラすらも、中継越しに放たれたアルマの視線と衝突した瞬間、息を呑んでゾクリと背筋を凍りつかせ、思わずその妖艶な身体を小さく震わせる。
「……っ、な、何よ……あれ……。本当に、人間なの……？」
煙管を持つ指先をかすかに震わせながら、カミラは掠れた声で恐怖を零す。
そんな空気の中、アルマは低い声で告げた。
『商人。依頼は受けてやる。だが条件は二つだ。一つ、この古城を踏破したら二度と私たちに関与するな……そしてもう一つ。これは質問だが……』
アルマは背中の大剣の柄へと、音もなく手をかけた。
『今あそこでレナを弄んでいる女は、お前が差し向けた手先か？　お前からの提案なのか？』
『ひ、ヒイッ……！　ち、違う、滅相もない！　あれは、あのカミラという女が私に持ちかけてきたんだ！　『小娘にやられた留飲を下げたくはないか』と……！』
命乞いのように喚き散らしながら、商人は保身のためにあっさりとカミラを売り払った。
『……そうか。ならば、お前たちとは無関係ということだな』
アルマは感情の籠もらない声で呟くと、背中から引き抜いた巨大な剣身を片手で軽々と持ち上げ、ヒュン、ヒュンと空気を切り裂く鋭い素振りを繰り返した。風切り音が不気味に室内へと響き渡る。
『依頼主の関係者に手をかけるのは、冒険者としての仁義に反するのだが……無関係の野良犬なら、どう壊そうと文句はあるまい』
次の瞬間、アルマは水晶のレンズの向こうにいるカミラへ向けて、真正面から痛烈で明確な殺気の刃を突き刺

した。
魔力回線を通じて部屋の空気すら凍てつかせるほどのその圧倒的な殺意に、カミラは息を呑み、煙管を持つ白く細い手をカタカタと激しく震わせる。
その瞬間、水晶の向こうでアルマの琥珀色の瞳が、画面越しに俺の濡れた瞳をまっすぐに見据えた。
オモチャの振動に奥を抉られ、全身を快楽に蕩かされながらも、意識の底で燻っていた思考が激しく火花を散らす。
（ここに来るのか……？　あいつ、俺を助けに来てくれるのか……!?）
今アルマがこの画面越しの俺に何を期待しているのか……その問いの答えは、長年の経験が一瞬で弾き出した。
思考より先に、俺の喉が裂けんばかりに吼える。
「俺の場所は……そこから……南南東！　距離およそ五キロだっ！　アルマぁぁッ!!」
部屋の窓の角度。カーテンから覗いた隙間から見た塔の位置。
どんなに無様な姿に堕ちようと、培った観測手としての技術だけは裏切らない。
俺の叫びを聞いたアルマは、水晶の向こうで短く、力強く応じた。
『わかった』
――ドンッッ!!!!!

大剣の一閃。
抜刀の余波だけで部屋の分厚い外壁が木っ端微塵に爆砕され、風が画面の向こう側で吹き荒れた。
商人が悲鳴を上げて床にへたり込む中、床を蹴り抜いたアルマの身体が、砲弾のような初速で画面から消えた。
「な、なんですって……!?」
カミラが青ざめて中継の光を見つめる。
相棒が必ず助けに来てくれるという絶対の確信。
その瞬間、極限まで張り詰めていた俺の身体の緊張がふっと弛緩してしまった。
それが、致命的だった。
緩んだ身体の奥底へ、暴れ狂う水晶の激震と吸引クリップの刺激が一気に逆流し、かつてないほど巨大な快楽の濁流となって全身を呑み込んだ。
「あ……っ、ま、ズぃ……ッ、アルマぁぁぁーーーッッ!!」
ビクンッと激しく背筋を反らし、全身がガクガクと痙攣する。
相棒へ座標を伝えた直後という最悪のタイミングで、俺はとめどなく蜜を吹き零しながら、情けなくも絶頂へと叩き落とされていた。
派手に蜜を吹き散らし、無様に果てて痙攣する俺を嘲笑う余裕すら、すでにカミラには残されていなかった。
画面の向こうで外壁が木っ端微塵に砕け散る轟音を聞き、その妖艶な顔面は見るも無残に引き攣っている。
「し、商人様……？　あの、私はどうすれば……？」
『わ、私はし、知らんぞ！　早く中継を切れ、カミラ！　あの女は化け物だ、化け物なんだぁぁッ!!』
豚のような悲鳴とともに、商人は腰を抜かしながら這うようにして画面の奥へ逃げ去った。
残されたカミラは眉を激しくひそめ、額に冷たい汗を滲ませながら、そわそわと落ち着きなく部屋の中を歩き

回る。
南南東へ五キロ。常識的な移動速度なら、どんなに急いでも十数分はかかる距離。だが、画面越しに叩きつけられたあの絶対的な怪物の気迫と初速を目の当たりにした本能が、カミラの警鐘をけたたましく鳴らし続けているのだろう。
「カミラ様……あの女、本当にここへ向かってくる気なのでしょうか……？」
女中の一人が青ざめた顔で震える声を漏らすと、もう一人も怯えたように唇を戦がせる。
「いくら何でも、歓楽街の複雑な路地を抜けてここまですぐに辿り着くなんて、人間にできるはずが……」
「黙りなさい！　あの目を、あの化け物の気配を見てまだ分からないの!?」
普段の冷静で妖艶な仮面をかなぐり捨て、カミラは金切り声を上げて女中たちを一喝した。
「……っ、急いで！　その小娘の道具をすべて外して回収しなさい！　今すぐここを撤収するわよ！」
「は、はいっ！」
カミラの露骨な焦燥に呑み込まれた女中たちが、慌てふためきながら床に倒れる俺の身体へ群がる。
胸と下腹部の張り詰めたクリップが乱暴に引き剥がされ、奥底から激震する共鳴水晶がずぶりと一気に引き抜かれた。
「んぁっ……あ、ぁ……っ」
突起を解放された痛痒感と、奥底を擦り抜けていく異物の余韻に、反射で甘い吐息が喉から漏れ出る。手足は自由になったものの、過剰な快楽の濁流に苛まれた肉体は完全に脱力し、俺は蜜に濡れた絨毯の上で仰向けのまま、乱れた息を繰り返すしかなかった。
だが。
そんな無残極まりない痴態を晒しながら、俺の口元は、ふふ、と低く歪んでいた。

「な、何よ……何がおかしいのよ、この小娘がッ！」
高価な魔導具を革袋へ詰め込みながら、カミラが苛立ちを隠せずにヒステリックな声を荒らげる。
俺は汗で額に張り付いた前髪の隙間から、薄い唇を微かに吊り上げてやった。
「……判断が、遅かったな。カミラ」
「なん……ですって……!?」
「魔道具なんざ放り出して、俺を置き去りにしてでも真っ先に窓から飛び出してりゃ……万に一つ、逃げ切れたかもしれねぇのによ」
「な、何が言いたいのよ……ッ！　たかが小娘一匹の身体を玩具にしただけで、私たちが逃げ隠れしなきゃいけない理由なんて――」
「豚野郎も言っていただろ……？　あの女は、規格外の化け物だってな」
俺は床に手を突き、震える身体をゆっくりと起こしながら、嘲笑混じりに死刑宣告を突きつけた。
「――もう、手遅れだけどな」

――ドンっ、と。

言葉の終わりと同時に、部屋の重厚な石壁が外側から壊された。
衝撃波が室内の絨毯を巻き上げ、吹き荒れる夜風とともに飛び散る無数の瓦礫。
そんな粉塵の向こうから、揺らめく一つの影。

「な、何事……ッ!?」
カミラと女中たちが悲鳴を上げて床へ尻餅をつく。
立ち込める白煙を切り裂いて現れたのは、身の丈ほどもある大剣を無造作に肩へ担ぎ、絶対的な殺気をそなえた銀髪の女剣士の姿だった。
「……待たせたな、レナ」
煙の向こうから落ちてきたその声は、静かで、けれどこの世のあらゆる命を容易く断ち切る絶対強者の重みを孕んでいる。
床に座り込み、息を乱しながらも、俺は不遜な笑みを深めてその頼もしい姿を見上げる。
「助かったよ……たっぷり啼かされた分のツケ、そこの雌狐からきっちり回収してくれ」
霞む視界の中で告げた俺に、アルマはふっと口元を緩めた。
だが、その切っ先は、すでにカミラの首筋数ミリ手前へと正確無比に突きつけられていた。
「私の可愛いレナをあんな顔にしてくれた礼だ……身体で支払ってもらおうか、雌狐」
強者の宣告が、密室内に冷酷に響き渡った。
「ひ……っ、あ……」
先ほどまで俺を散々いたぶり、蕩けきった喘ぎ声を絞り出させて悦に入っていたはずの女は、いまや声帯を引き攣らせて震えていた。
背後で俺の手首を押さえつけていた二人の女中に至っては、アルマの放った殺気と地響きのような風圧に当てられ、腰を抜かして泡を吹き、壁際で意識を手放している。
「……おいアルマ。話は後だ、そいつをさっさと縛り上げるなりなんなりしてくれ。ここは敵の縄張りだぞ」
俺が床に手をつき、乱れた息のまま急かすと、アルマは琥珀色の瞳をすっと細めて首を横に振った。

「縛り上げる？　いや……そんな生ぬるい真似で済ませるわけがないだろう」
「な、何よ……っ、何を企んでるのよ……っ!?」
カミラが恐怖に震える声を絞り出す。
アルマは感情の読めない冷徹な美貌のまま、淡々と死刑宣告を口にした。
「お前はプロの娼婦なのだろう？　ならば、他人に与えた快楽の責任は、己の身体で清算するのが筋というものだ」
ドスン、と大剣が床の絨毯へと深々と突き立てられる。
カミラが悲鳴を上げて逃げ出そうと身をよじった瞬間には、アルマの長身がすでにその背後へと音もなく滑り込んでいた。
「ひぎゃッ!?」
万力のような腕がカミラの豊かな腰を背後から強引に引き倒し、深紅の絹ドレスごと、冷たい床の上へうつ伏せに組み敷いた。
抗おうと爪を立てるカミラの細い手首を、アルマは片手だけで容易くまとめ上げ、その背骨の上へと容赦なく体重を乗せる。
だが、その派手な騒ぎに、俺の警戒がすぐさま反応した。
吹き飛ばされた外壁の大きな穴の外。通りや向かいの店から、何事かと歓楽街の用心棒や野次馬どもがざわざわと集まり始めている。
（チッ……不味いな）
俺は慌てて近くで気絶していた女中の上着をひったくると、剥き出しの身体を隠すように身体へ巻き付けた。
「おいアルマ、まずいぞ！　人が集まってきている……！　これ以上ここで手荒な真似をしたら、街の自警団や

裏組織全体を敵に回すことになるぞ！」
「だが、先に手を出してきたのはこいつらだぞ？　レナリア」
「それはそうだが……暗黙のルールで歓楽街は成り立ってんだ。面子を潰しすぎると後が厄介なんだよ！」
余計な揉め事を起こさないのが、この手の裏街の絶対的な不文律だ。
俺の必死の説得に、アルマは少しだけ視線を宙へ泳がせ、深く納得したように頷いた。
「……分かった」
そう言うと、アルマは背中を組み敷いたまま、腰袋からずっしりと重い金貨の革袋を取り出し、床に顔を押し付けられているカミラの鼻先へと無造作に放り投げた。
ジャラリ、と重厚な金属音が耳元で鈍く響き渡る。
俺の脳裏に、先ほど水晶越しに見た光景が思いだされた。
（あ、あれは……あの豚商人が、前払いだと言ってテーブルに置いた金貨……か？）
あの短時間でここまで駆け抜けてきただけでなく、報酬はしっかりと回収してきていたのだ。抜け目のなさに呆気にとられる俺の頭上で、アルマは冷徹な眼差しのまま問いを落とす。
「お前……カミラとか言ったな？」
「な、何よ……これ……」
怯えるカミラの目の前に転がる、目の眩むような金貨の山。
アルマは至極真面目な顔のまま、衆人全員に聞こえるような堂々たる美声で言い放った。
「この金貨で、私が今からお前を買おう。そして……今から私がするのは、客としての至極真っ当な『マッサージ』だ……いいな？」

「お、おいアルマ……ッ!?」

俺の制止などどこ吹く風、アルマの太い指先が、カミラのドレスの裾へと無慈悲に伸びる。

「は、離しなさいよ化け物……っ！　私を誰だと思って――」

「誰だろうと構わんさ。ただ、お前がレナのあの可愛いイキ顔を引き出したという事実だけが重要だ。……随分と手慣れた指使いをしていたようだが、自分の身体の急所についてはどれほど理解しているんだ？」

「な、なによその金……っ！　冗談じゃないわ、誰が女剣士なんかに買われるもんですか、離しなさ……な……っ、やめ……っ！　だれかっ！　たすけて!!」

プロの誇りをかなぐり捨てて悲鳴を上げる娼婦と、淡々と買収を成立させて処刑を開始しようとする天然の怪物。

崩れた壁の外で息を呑む衆人たちを背に、俺はただただ頭を抱えるしかなかった。

「ちょ、ちょっと……っ！　どこ触って……っ、ドレスを破くんじゃないわよ！　この野蛮人が……っ！」

「ふん……っ、大剣を振り回すだけの筋肉女が、娼婦の身体をどうこうできるわけないでしょ……んくっ!?」

「な……っ、なんで、そこを……っ！　そ、そんなに正確に……っ、胸の先、摘まないで……っ！」

「あっ、や……っ！　嘘でしょ……っ、指の力が……強すぎるのよ……っ、じんじん、熱くなっちゃって……っ！」

「やめ……っ！　下まで……っ、下着をずらさないで……っ！　私は……っ、私はこの街の筆頭娼婦なのよ……っ、こんな……あっ、あんっ！」

「ひぅっ……!?　だ、め……っ、そんな、指の腹で……っ、一番敏感なところをゴリゴリ擦られたら……っ！」

「ち、違う……っ！　濡れてなんかないわよ……っ！　これは、その……っ、あんたの手が熱いから……っ、ひゃぁっ!?」

「う、嘘……っ、中に……っ、指が……っ、そんな奥まで……っ、かき回さないで……っ！　頭が、真っ白に……っ！」

「あ……っ、ダメ……っ、いやっ……！　こんなの、客に……っ、女にイかされるなんて……っ、あ、あぁぁぁ――――ッッ!!」

俺の目の前で、この街を牛耳っていたはずの筆頭娼婦が、あっけなく背中を弓なりに跳ねさせてイかされていた。

乱れた深紅の絹ドレスから覗く白い背筋が、浅い呼吸とともに激しく波打ち、床の絨毯の上で指先を小刻みに痙攣させている。滴る汗と涙でぐしゃぐしゃになったその横顔には、先ほどまでの狡猾な自信など微塵もなく、ただただ女として屈服させられた生々しい羞恥と快楽の余韻だけが焼き付いていた。

吹き飛ばされた外壁の向こう。

通りを埋め尽くした野次馬どもは、誰一人として動くこともできず、ただ息を呑んでその光景に釘付けになっている。

普段なら金貨をいくら積んでも拝むことすら叶わない高嶺の花が、床に組み敷かれて無残に啼かされる姿。

ちらりと視線を巡らせ、集まった男どもの股間に目をやると、どいつもこいつも一様にズボンの前をみっともなく膨らませていた。

（まったく……どいつもこいつも、情けねぇツラしやがって）

内心で呆れ返る反面、かつて男として生きていた俺には、その反応も「まぁ、気持ちも分からんでもないな」という妙な納得感があった。あれだけの妖艶な美女が、抗う術もなく弄ばれて蜜に濡れているのだ。男の本能として目が離せなくなるのも無理はない。

「……おいアルマ、そろそろその辺にしておけ。目的は果たしただろ」

俺は身体を隠しながら、ため息混じりに声をかけた。

だが、カミラの腰を押さえつけたままのアルマは、瞳を至極真面目な光で輝かせ、凛とした声で言い放った。
「何を言っているんだ、レナ。お前が言ったのだろう、歓楽街の暗黙のルールを守れと。私は正当な対価として大金を前払いした。ならば、客として最後までしっかりとやりきらなければ、この女のプロとしての矜持にも失礼というものだ」
「いや、そういう意味のルールじゃねぇよ筋肉バカ！」
「安心しろ。レナを啼かせたあの上手な手際を、今度はこの女自身の身体で余すところなく再現してやるだけだ……ほら、次は第二幕だぞ、カミラ」
「ひっ……あ、許し……っ、もう、許してぇ……っ！」
床に額を擦り付け、先ほどまでのドSな余裕を完全に失ってガタガタと震えるカミラを見て、俺は深く天を仰いだ。
（……カミラ。相手が悪すぎたな）
怒らせてはいけない怪物の地雷を、一番最悪な形で踏み抜いてしまった哀れな雌狐へ、俺は心の中でほんの少しだけ同情の念を抱かずにはいられなかった。

「ま、待ちなさい……っ！　息が……っ、息がまだ整ってないのよ……っ、ひゃうッ!?」
「ちょっ、足を掴んで……っ、やめなさい、そんなに大きく開かないで……っ！　みんな見てるのよ……っ!?」
「う、後ろから羽交い締めにされたら……っ、逃げら、れない……っ、離しなさいよぉ……っ！」
「ひっ……!?　そこっ……爪先で皮を剥かないで……っ、剥き出しにされたら……っ、触るだけで……っ！」
「や、だ……っ、口……っ!?　嘘でしょ、直接吸い付く気……っ!?　だめぇぇッ、直は……直はダメぇぇッ!!」
「じゅ……っ、ひぎぃぃッ!?!?　んぐッ、んんぅぅぅッ!!　す、吸うなぁッ……強く吸うなぁぁッ!!」

「あ〝っ……!?　頭が〝……っ、割れ〝る……っ！　舌で〝……っ、転がさ〝ないで〝ぇぇッ!!」
「もう〝無理ぃぃッ……！　お腹の〝底が〝……っ、熱い〝の……っ、ぜんぶ引き絞ら〝れちゃうぅッ!!」
「あ〝、あ〝あ〝ぁぁッ――!!　止〝まらな〝い……っ、背中〝が、折れ〝ちゃうぅぅッ!!」
「い〝く〝ぅぅッ!!　い〝っちゃう〝ぅぅぅツツ――!!　あ〝あ〝あ〝ぁぁぁーーーツツ！！！！」

弓なりに反りきった身体が床へと力なく崩れ落ち、カミラは荒い息のままピクリとも動かなくなった。薄紅の舌がだらしなく口端からこぼれ落ち、涙と涎、それに滴る汗が混ざり合って、自慢の美貌は見る影もなくでろでろに崩壊している。全身の骨が抜かれてしまったかのように、ただ指先だけがかすかな痙攣を繰り返していた。
「……おいアルマ、本当にそろそろ……」
上着をしっかり掻き抱いた俺が呆れ半分、引き気味に声をかける。
だが、最強の女剣士はふうと満足げな吐息をつきつつも、瞳を微塵も鈍らせていなかった。
「何を言っている、レナ。この街の頂点に君臨するプロの娼婦だぞ？　客を喜ばせるためのこれくらいの演技、朝飯前でこなせなくてどうする」
「……は？」
「まだまだだ。レナのあの極上の啼き声に報いるには、この女の限界をきっちりと超えてもらわなければ筋が通らない」
（いや……絶対演技じゃねぇだろ……）
俺は心の中でため息をついた。
あのアルマの常軌を逸した馬力と急所責めを叩き込まれたのだ。どんな百戦錬磨の娼婦だろうと、演技で耐えられるはずがない。

「ひ……っ、あ……許し……もう許してください……っ、おねがい……なんでもしますからぁ……っ」
床に額を擦り付け、涙で視界を滲ませながらアルマの足首に縋りつくカミラ。
完全に恐怖と絶望に染まりきった『本物の懇願』そのものだった。
「ほら見ろアルマ、この顔は本気のやつだろ……」
俺の制止を耳にしながら、アルマは心底感心したように口元を綻ばせた。
「ふふっ……さすがはプロだな。客の征服欲を煽るツボを実によく理解している。そこまで名残惜しそうにねだられては、客としても応えないわけにはいかないな」
「話を聞け筋肉バカぁぁッ!!」
アルマの両手が、カミラの細い腰を再び容赦なく引き寄せる。
「さぁ、いくぞ。まだ始まったばかりだ」
「いやぁぁぁぁぁーーーーッツ!!!!」
歓楽街の空へ、カミラの魂の底からの悲鳴が木霊した。

「う、嘘でしょ……っ!?　まだやる気なの……っ、もう無理、本当に……ひぎゃぁッ!?」
「あ〝っ、ダメぇぇッ！　指……っ、そんな奥の天井をグリグリ抉ら〝ないでぇぇッ!!」
「ちょっ、と……っ、触っただけで〝……っ、電気が走っ……あっ、あ〝あ〝ッ――!?」
「もう限界な〝のぉぉッ！　ちょっと動かされただけで〝……っ、すぐイッちゃうぅぅッ!!　あ〝あ〝あ〝ぁぁーーッツ!!」
「はぁっ、はぁっ……っ！　謝る……っ、謝るからぁ……っ！　許して……お願いいいッ……！」
「レ、レナ様ぁぁっ……！　生意気な小娘だなんて言って……っ、オモチャにして……っ、恥ずかしい姿を中継して……っ、本当にごめんなさぁぁいッ！」

「ひぃッ……!?　謝ってるのに……っ、謝ってるのに指を抜いてくれないぃぃッ……！」
「お仕置きなんて調子に乗って……っ、豚野郎に恩を売るためにあなたを罠にハメて……っ、いじめて本当にごめんなさいぃぃッ！　二度と……二度と逆らいませんからぁぁッ!!」
「あ〝っ、指が……っ、三本……っ!?　そんなに広げられたら〝……っ、お腹が裂けちゃうぅぅッ!!」
「もう許してぇぇッ!!　イく〝ぅぅッ、頭が真っ白に割れ〝ちゃうぅぅツツ――!!　あ〝あ〝あ〝ぁぁぁぁ――――ツツツ！！！」
問答無用に絶頂へと叩き落とされた高級娼婦は、糸の切れた人形のように床へ崩れ落ちていた。
華美な深紅のドレスは溢れ出た大量の愛液でどろどろに汚れ、捲れ上がった裾の奥からは、完全に弛緩した秘部が隠されることもなく野次馬たちの好奇の視線に晒されている。
白目を剥き、だらしなく舌を垂らした無様なアヘ顔を晒したまま、ピクピクと手足を小さく痙攣させて完全に意識を飛ばしていた。
（……なんかもうエロいを通り越して、惨状だな……）
あまりの凄惨さに、俺は身体の疲労感を覚えながらも、心の中でそっと手を合わせた。
「……なぁアルマ。もう俺、怒ってねぇから……そいつを許してやってくれ」
「そうか？　プロに敬意を表して、もう二回くらいはきっちりイかせてやろうと思っていたんだが……お前がそう言うなら、ここで切り上げるか」
「……これ以上やったら本当に息の根が止まるぞ」
涙目で小刻みに痙攣し、蜜を吹き散らかしてでろでろに崩れ落ちたカミラの無残な姿。
俺はため息をつきながら、近くにあった絹のシーツを拾い上げ、その剥き出しの肢体の上へそっと広げて隠してやった。
敵の手先で、さっきまで散々俺をオモチャにしてくれた憎たらしい相手ではあるが……ここまで徹底的に壊さ

れてしまうと、さすがに哀れみの情が湧いてくる。
「……まぁ、とりあえずありがとよ、アルマ。助かった」
「あぁ。お前が無事で何よりだ、レナ」
カラッとした笑顔を向けてくるアルマに、俺は崩れ落ちた外壁の向こうを顎で指し示した。
「感傷に浸ってる暇はねぇぞ。ギャラリーも集まってきてるし、自警団が来る前に早くここから離れるぞ！」
「あぁ」
アルマは大剣を背中へと滑り込ませると、俺の細い腰を軽々と小脇に抱え上げ、歓楽街の外へと飛び出した。